
ギャグ小説・桃太郎

オネーギン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギャグ小説・桃太郎

【Nコード】

N7816T

【作者名】

オネーギン

【あらすじ】

頃は江戸中期、ひよんなことから奥州の大名陸奥藩の世継ぎとなつた桃太郎は、藩の窮状を救うべく同い年の盟友犬之進を従え、鬼の財宝を奪いに鬼が島へと赴くが・・・

第一章 な、何としたことだ！桃の中に赤子がおるぞ！の巻（前書き）

もし、ギャグ好きの映画監督がいたとしたら、昔話桃太郎をこのよ
うなストーリーで映画化したのではなかるうかと思いき書き出しまし
た。尚、当方は文才に乏しく、単調な描写や読みづらい点が多々
見受けられるとは思いますが、その点は平にご容赦のほどを・・・

第一章 な、何としたことだ！桃の中に赤子がおるぞ！の巻

戦国の乱世が終わりを告げて二百年がたち、徳川幕府の厳格な治世が何代にもわたって続いていた江戸中期、各藩の大名は幕府に逆らうことなく日々退屈で刺激のない暮らしを送っていた。

ここ奥州の米どころとして百万石の禄高を誇る陸奥藩もその例外にもれず、藩主の阿部春家は、藩の政務をすべて家臣に任せ、参勤交代で江戸表へ出向くほかは職務らしきことは何もしていなかった。

日がな一日悶々とした暮らしに明け暮れる春家は、今日も朝から天守閣に登り、二つ年上の姉さん女房、紫と家臣の屋敷や町民長屋、それに遠く広がる稲穂が実った田をのんびりと眺めていた。

「今年も豊作だ、民は皆潤うぞ」
三十を前にして早くも頭の禿げあがった春家が、そういつて目を細めた。

「民は潤っても、わたくしの心は晴れませんわ」
春家の傍らに寄り添うように立っていた紫が、浮かぬ顔でつぶやいた。

「……ん？ 心が晴れぬとはどういうことだ、悩みごとでもあるのか？」

春家は思わず訝った。

「京の都を離れ、この地へ嫁いで早十四年、いまだ子宝に恵まれませんのよ」

と、紫がため息をついた。

「なーんだ、そんなことか」

何事かと危惧した春家はそう言ってせせら笑った。

「そんなことじゃありませんわ。世継ぎがいなければ藩は取り潰しになるのですよ」

「わかっておる、わかっておるが出来んから仕方がなかつた」

「何をおっしゃるのです、そのように暢気に構えている場合ではありませんのよ」

「わしとて子は欲しいのだ、しかしな、こればかりは天の授かりものだからどうにもならん」

「どうにもならんで済む問題ではありませんでしょうに！」

紫は堪らず声を荒げた。

「そう責めるなよ、待てば海路の日和ありというではないか。そのうちコウノトリが運んでくるかもしれんぞ」

「コウノトリですって！ 本気でおっしゃてるの？」

「いや、たとえ話だよ。・・・たとえ話」

苛立つ紫に、春家は苦笑いを浮かべてその場を繕った。

「まったく情けない、そんなことだから側室にも愛想をつかされるのです」

「と、とんでもない、あの女はわしのほうで追い出したのだ。あの女は色キチガイだぞ」

「色キチガイ？」

「そうだ、あの女は牛のような体を震わせて毎晩のようにのしかかってくるのだ。わしは何度もつぶされそうになったのだぞ」

「それがどうだというのです？ 世継ぎを得るためなら死ぬ思いで耐えねばなりませんのよ」

「そうは言うが、わしにはとても無理だ」

「だからあなたはダメなのです。実家の三条家が何と云ってるかわかりますの？ たとえ子供をさらってきてでも世継ぎを作れと申しておりますのよ」

「そなたの実家は公家だから体面の重んじてそう云っておるのだよ。気にすることもあるまい」

「何をおっしゃいます！ 体面を重んじるのは実家よりもあなたのほうでしょうが、あなたは一国一城の主なんですよ」

よそ事のような顔をする春家に、紫は堪らず声を荒げた。

と、その時、「殿」と呼びかける声が聞こえてきた。盛んに言いこめられていた春家がこれ幸いとばかりに振り向くと、五十過ぎとは思えぬ軽やかな足取りで家老の小塚犬吾こづかけんごが階段を上ってきた。

「小塚、わしに用があるのか？」
春家は天の助けとばかりに声をかけた。

「殿、珍しい物が手に入りましたぞ」
春家を見るなり、小塚はにこやかな顔でそういった。

「ほほう、そりゃいったい何だ？」

「桃が手に入りました」

「何、桃だと？」

「左様でございます」

「実りの秋だというのに、季節外れの桃が手に入るとは何とも珍しいではないか、これは一興だぞ」

春家は興味津々とばかりに目を輝かせた。

「子供じゃあるまいし、桃ぐらいで何を騒いでいるのです？」
すぐさま紫が口を挟んだ。

「紫様、それが並みの桃ではないのです。この小塚犬吾、陸奥藩にお仕えて三十有余年になりますが、これほどまでに大きな桃は未だかつて見たことがございません、まるでお化けカボチャのようなとてつもない大桃ですぞ」

「カボチャのような大桃？」

「はい、ご覧になれば一目瞭然、紫様も得心なさるはずです」

「そのような逸品、どのようにして手に入れたのです？」

「はい、それが先ほど、城下で染物業を営んでおる紺屋染左右衛門こんやそめびえもんという男がぜひとも殿に献上したいといって持参したのです」

「何！ぜひとも献上たいと申したのか？」

それを聞いた春家は、紫を制するように割って入った。

「おっしゃる通りでございます」

「そうか、それはでかした。ではすぐに参るぞ」

小塚が言い終えるや否や、気が急いだ春家はドカドカと足音を立てて階段を下りて行った。

「紫様もぜひご覧になってください。この世のものとも思えぬほどのズングリ、ムツクリとした大桃ですぞ」

「そんなに大きな桃なの？」

紫もさすがに興味を示し、自慢げに話す小塚とともに天守閣を下りて行った。

ほどなく、三人がそろって城の中庭に出ると、一表の米を丸ごとおにぎりにしたような巨大な桃が地べたに敷いたゴザの上に置いてあった。

「これ、紺屋とやら、この桃をどこで手に入れたのだ？」

一目桃を見た春家は、桃のそばでひれ伏している染左右衛門に驚きも新たに問いかけた。

「恐れながら申し上げます。今朝ほど、染め上った反物を川で洗っておりますと、この桃がどんぶらこ、どんぶらこ川上から流れてきたのです」

染左右衛門が面を上げて答えた。

「では、川から拾ってきたのだな？」

「左様でございます」

「して、なぜゆえにこの桃を献上したのだ？」

「はい、日頃より染色を生業なりわいといたし、色染め一筋に技を磨いてきた私は、たとえ天地がひっくり返ろうとも川面に流した染物から一時たりとも目を離れたことはなつかたのですが、この桃を目にしたときは思わず気が緩み、ゴクリと喉を鳴らしかぶりつこうとしたのです。しかし、このような珍品はめったにお目にかかれるものではございません。そこで私ははたと思いとどまり、これぞ人望の厚い我が藩の殿様への献上品だと確信し、持参した次第でございます」

染左右衛門が畏まって申し述べた。

「そうか、それはよい心がけである、誉めてつかわずぞ」

「ははーっ、ありがたきお言葉、痛み入ります」

染左右衛門は再び平伏した。

「殿、このような桃を律儀にも献上した染左右衛門に、褒美を与えてはいかがかと存じますが？」

すかさず小塚が進言した。

「うーん、まっ、それは後から考えることにしよう」「桃が気になって仕方がないが、軽くそう答えて桃のそばへ寄った。

「見れば見るほどおいしそうな桃だこと」「じっと見つめていた紫も、甘い香りに誘われ思わず口元をゆるませた。

「よく熟しておりますので、今が食べごろかと存じます」「染左右衛門が、上目ずかいに二人を見て言った。

「いわれてみればその通りだ、これは堪らん、小塚包丁を持ってまいれ」

春家はゴクリと唾を飲んで小塚を促した。

「ははーっ」
春家の意を受けた小塚は、さっそく賄まかないから包丁を持ち出しそそくさと持参した。

「小塚桃を食すぞ」
春家は我慢しきれず、さっと包丁を取り上げた。

「殿、食するにしてもこれだけの大桃ですと皮を剥くだけでも一苦労ですぞ」
すぐさま小塚が進言した。

「なるほど、小塚の言う通りかも知らん」
春家はふと思いとどまった。

「殿、されば桃を切り分け、むしゃぶるのがよろしいかと存じます」

「そうか、では四つに分けるとしよ。一つはわしの分、もう一つは紫、そしてもう一つは小塚、もう一つは褒美として染左右衛門に与えるとしよ」

春家はそう言つてぐさりと桃に包丁を入れた。すると、桃の中から盛りの付いた猫のような泣き声が聞こえてきた。

「……ん？ 何やら声が聞こえるぞ」

訝った春家は庖丁を手に切り口をこじ開けた。

「うわーっ、何だこれは！」

中をのぞき見た春家は思わずのけぞった。

「殿、いかがなされました？」

ただならぬ様子に驚いた小塚がさつと駆け寄った。

「……こ、これを見ても」

春家は腰を抜かささんばかりに中を指差した。

「桃の中に何かいるとでも？」

たちまち怪しんだ小塚が中をのぞくと、丸裸の赤ん坊が「おぎゃーっ、おぎゃーっ」と盛んに泣き声をあげていた。

「な、何としたことだ！ 赤子がおるぞ！」
小塚が仰天して叫んだ。

「赤子？」「えーっ？」

驚いた紫と染左右衛門も、顔色を色を変えてのぞき込んだ。

「な、な、何と・・・驚き、桃の木、山椒の木、えのきに筭に柏の木、こんなことがあっていいのやら？」

染左右衛門は思わず目を瞬かせた。

「何をうるたえているのです、赤子を取り出さねば死んでしまうでしょうが！」

たじろぐ春家たちをよそに、はつとして母性本能に目覚めた紫は、啞然としてたたずむ染左右衛門を促し、桃の中から赤ん坊を取り出した。

「小塚、たらいを入れた湯・・・ではない、湯を入れたたらいを持つてきなさい」

紫は泣きじゃくる赤ん坊を抱きながら小塚に命じた。

「は、はい、たらいを入れた湯、ではない、湯を入れたたらいですか？」

小塚は血相を変えて走り出し、湯屋からお湯を入れたたらいを運んできた。

「ほーら、いい子だねえ、体を拭いてあげるからおとなしくしていなさいよ」

紫はそつと赤ん坊を湯につけて桃の汁を拭った。

「摩訶不思議地はこのことだぞ」

春家が目を見張ってつぶやいた。

「まことでございませす、桃から赤子が生まれるとは？」

小塚も驚きを隠せずに言った。

「殿様、どうかお叱りの内容に願います。このような愚にもつかぬまやかし物とは、一向に存じませんでした」

染左右衛門は、平にご容赦をとひれ伏した。

「謝ることなどありません、それよりも私のほうが感謝したいくらいです。この子はわたしの宝物ですわ」

紫はそう言っつてようやく泣き止んだ赤ん坊を抱きしめた。

「たわけたことをいうでない、ひよっとして魔物かもしれんだぞ」
春家は思わず声を荒げた。

「いいえ、ここ子は世継ぎのない陸奥藩のために天が授けてくれたのです。きつとそうに違いありませんわ」

「馬鹿を申す出ない、何を血迷つておるのだ」

堪らず春家が咎めた。すると、神妙な顔をして赤ん坊を見つめていた小塚が、おもむろに進み出て行った。

「殿、紫様の言う通りかもしれませんぞ」

「お前まで何を言うのだ」

「しかし殿、わが国には古くからの言い伝えの中に、竹から生まれた姫君の話が伝わっております。されば、桃から生まれた若君がいとも一向に不思議ではございませんぞ」

「その通りですわ」

すぐさま紫が相槌を打った。

「そうとは言えこのような得体の知れぬ者を世継ぎにするなど……」
春家は、さすがに二の足を踏んだ。

「何をためらっているのです？ この子は陸奥藩の立派な跡取りですわ」

紫は頑として言い張った。

「うーん……」

春家は困り顔でしばらく考え込んでいたが、愛くるしい赤ん坊の顔おじっと見ていると、ふと我が子のように思えてきた。

「仕方あるまい、こんなかわいい子を放ってはおけまい」
春家はそうつぶやいて口元をゆるめた。

「殿、正しいご決断ですぞ」「これで陸奥藩も安泰ですわ」
小塚と紫は笑みを浮かべながら顔を見合わせた。

「もはや、子はできんとあきらめていたが、このような途方もないことで世継ぎを得るとは、幸と不幸は裏腹なもんだなあ、うーん……」

春家は感慨深げにそうつぶやき、ため息をついた。……が、すぐにはっとして表情を変えた。

「そうだ、ちよっと待て！」

「殿、まだご不満でも？」

「わしは赤子の性別を確かめておらんぞ。もし女なら世継ぎにはならん、この赤子は本当に男なのか？」
春家は顔色を変えて問いただした。

紫は表情も晴れやかにそれに答えた。

「ご心配には及びませんわ、この子は立派な世継ぎです。ちゃんとオチンチンがついてますわ」

紫はそう言って、これ見よがしに赤ん坊の一物を見せつけた。

第二章　これは困った、これは困ったぞ！　の巻

桃がもたらした摩訶不思議な出来事から十二年の月日が流れた。ひよんなことからこの世に生を受け陸奥藩の世継ぎとなった赤子は、名を桃太郎と名付けられ、日々すすくと成長していた。

「えいつ！　やあつ！」

甲高い声とともに木剣をまじわす響きが轟いた。

「犬之進、腰を入れて打つんだ！」

「はい、桃太郎様！」

桃太郎と犬之進は、息を弾ませながら木剣を振るった。

「桃太郎様、今度は容赦はしませんよ」

「犬之進こそ覚悟しろ」

桃太郎の相手は、小塚の嫡男で同い年の犬之進であった。互いに盟友として認めあう二人は、藩の剣術指南として名をはせた劍豪、千葉玄武の指導の下、城内の中庭で日々鍛錬を続けていた。

「えいつ！」

「とおつ！」

「やあつ！」

二人は真剣勝負さながらに目を輝かせて打ち合っていた。

「よし、そこまで！」

木剣を逆手に持った玄武が、トン！と、地べたをついて声をかけた。二人はすぐさま打ち合いをやめて玄武に向き直った。

「若君、大分腕を上げましたな」

玄武が頼もしそうに言った。

「犬之進のおかげだよ」

桃太郎が汗まみれの顔を犬之進に向けてほほ笑んだ。

「いくら頑張っても桃太郎様にはかないません」

汗を拭いながら犬之進が照れ笑いを浮かべた。

「お二人とも日ごとに強くなっておられますぞ、剣の道に携わるこの玄武、まことに嬉しい限りです、ハハハハ」

玄武は満足そうにそう言って、日に焼けた顔をゆるませた。

「よし、犬之進。もうひと勝負だ」

玄武の言葉に気をよくした桃太郎が、木剣を握りなおして犬之進を促した。

「望むところです、桃太郎様」

「えいつ！」

「やあつ！」

春の淡い日差しがさす城内に、再び掛け声が轟いた。

「たくましくなったのう」

この様子を天守閣から見下ろしていた春家が、細い目をさらに細く

してつぶやいた。

「剣術ばかり熱心で困ったものです、学問はとんとおろそかなんですのよ」

傍らで眺めていた紫が不満げな顔をしていった。

「学問などどうでもよいではないか、体が丈夫なのが一番だぞ」

「何をおっしゃるのです、桃太郎は藩主となる身ですのよ。武芸百般に秀でてこそ家臣や民から信頼されるのです」

「とはいっても、桃太郎はまだ子供だぞ。そなたの思い通りに育てることもあるまいと思うがなあ」

「無責任なことをおっしゃいますわねえ、今のこの時期が一番肝心なんですのよ、それがお分かりになりませんか？」

「それは分かるが、そなたの与えた書物など難しくて理解できまい。春家はそう言って、紫が国禁を破ってひそかに手に入れたマキャベリーの君主論や、プラトンの国家論、それに、藩校の図書蔵から集めた国学や朱子学など幾多の書物を例に出して述べ立てた。言いくさが気に入らない紫は、たちまちムキになった。

「藩校の師範を総動員させて教え込んでいるのですよ、理解できぬはずはありません」

「それはどうか分からんぞ」

「あの子は賢い子です、書物の百冊や二百冊その気になれば一晩で読破しますわ」

「このわしでさえ国学や朱子学などチンプンカンプンでさっぱり分からんというのに、ましてや紅毛碧眼の毛唐の書いた書物など、禅宗の坊主におなごの扱い方を教えるようなものではないか」

「何とはしたない喩え方をなさるのです、これだから教養のない武者上がりの大名は困るのですよ」

「教養がないとはなんだ！ それを承知で嫁に来たのは、そちの方ではないか」

「親同士が決めた婚姻、いまさら後悔しても仕方ありませんよ。そんな埒もないことより桃太郎の模範となるよう学問を究め、天下に名をはせる大名を目指したらいかがですか？」
紫はなおさらムキになった。

「学問、学問と口うるさく言うが、わしとて藩主の端くれ、日々書物に親しでおるのだぞ。そちも分かかっておろうが」

「よくもまあ又ケ又ケとおっしゃいますわね、あれは書物とは言わず世間一般では漫画と呼ばれている低俗な類たぐいの馬鹿本ですよ。それも愛読書が妖怪猫ドラ衛門だなんてあきれて物も言われませんわ」

「漫画とて書物だぞ、漢字ばかりの朱子学よりドラ衛門の空想劇の方が、よっぽど分かりやすいではないか」

「何をおっしゃるのです！ まったく情けない限りですわ、それでも藩を収める君主ですの？」

堪らず紫が癩癩を起こした。春家はばつが悪そうにエホン！と咳払いをして横を向いた。

と、そこへ、家老の小塚がおもむろに現れ、片膝を落として声をかけた。

「殿、御来客です」

「来客だと？ 予定にもないのにいったい誰が参ったのだ？」
春家はすぐさま威厳を取り戻して振り向いた。

「はい、やまこしえははん山越藩の藩主、もちづきごほのかみたねおみ望月賭場守種臣様です」
小塚が畏まっていった。

「な、何だと！」

その名を聞いたとたん、春家の顔に動揺が走った。

「至急お目にかかりたいと申しておられます」

「だめだ、だめだ、留守だといって追い返せ」

「はあっ？」

「何でもいいから追い返すんだ」

「しかしながら、急ぎの要件ゆえ、是非ともお取次ぎ願いたいと申されておりますが」

「まことにそう言ったのか？」

「はい」

「困った、これは困ったぞ」

春家は胸元から扇子を取り出し、バタバタと仰ぎだした。

「あなた、何か隠し事でもあるのでは？」

狼狽する春家を目の当たりにした紫は、とたんに不審を抱いた。

「えっ、か、隠すって何を？・・・」

春家は、どきりとして口ごもった。

「やっぱりそうだわ、賭場守に何か弱みでも握られているのではありませんか？」

感ずるどく紫が詰め寄った。

「な、何を言い出すのだ。弱みなどあるはずがなかるうが」

「では、なぜそのようにびくついているのです？」

「びくついてなどおらんぞ、ただ借金のことが気になって・・・あつ、しまった！」

春家は、思わず口を滑らせた。

「借金ですって？」

とたんに紫の顔が引きつった。

「・・・」

「あなた、いったいどうしたことなの？」

紫はかりかりとなって目をつり上げた。春家は手にした扇子でさっ

と顔を隠したが、紫の剣幕に気負われ、ぼそぼそと話し出した。

「……実は、賭場守から金を借りたのだよ」

「いくら借りたのです？」

「それが、そのっ」

「はつきりおっしゃいっ！」

「は、はい、金子きんすにして、……十万両ほど」

春家は蚊の鳴くような声でつぶやき、手にした扇子でまた顔を隠した。

「十万両ですって！」

「借りたのは一万両だが利息が膨らんでそうだったのだよ」
春家が慌てて言い足した。

「いったい何に使ったのです？」

「……」

春家はうつむいたまま押し黙った。

「いったい何に使ったのか聞いているんですよ！」

紫は思わず声を荒げて問い詰めた。

「博打だよ」

春家がぼつりと言った。

「何ですって！」

紫が堪らずあきれ返えると、晴春は申し訳なさそうに話出した。

「去年の夏、参勤交代で江戸表へ出向いたとき、博打奉行の賭場守が主催した大奥杯争奪チンチロリン大会に参加したのだよ」

「まったくあなたという人は、何のために江戸表まで出向いたのです？」

「もちろんわしは、やるつもりはなかったんだ。だが賭場守が言うには、儲ければこの先十年でも二十年でも陸奥藩は安泰だからぜひとも参加しろと誘われたんだよ。

わしもついその気になって誘いに乗ったんだが、持ち金を全部使果たし、帰りの旅費さえなくなってしまったのだ。

わしががっかりしていると、そのうち付きが回ってくるからと言って賭場守が一万両を融通してくれたのだよ。金を見たとたんに気が大きくなったわしはすぐにそれを受け取ってまた博打を始めただ。だが、付きが回るどころかまた金を使いきってしまったのだ。

すると、また賭場守が金を貸すといってきたのだよ。しかしわしは、もうこりこりだといって博打場を抜け出し、飲まず食わずの飢餓状態で藩に戻ってきたのだ」

春家はそう言い終えるら理、がくりと肩を落として座り込んだ。

「何という馬鹿なことを・・・」

紫はあまりの愚かさに開いた口がふさがらなかった。

「殿、ではあの時、皆がやつれ果てて帰ってきたのはそのせいだったのですな？ 一向に存じ上げませんでしたぞ。されば、賭場守様は十万両という途方もない借金を取り立てに参ったということですか？」

小塚が青ざめた顔で言った。春家は無言のままコクリとうなずいた。

「殿、これはお家の一大事ですぞ！ いかげなさるおつもりです？」
小塚はギョツと拳を握って春家を見据えたが、晴家はただじつとうつむいたままだった。

もはや、春家では埒があかぬと判断した紫は、賭場守に元金の支払いだけで済むよう直談判する決意を固めた。

紫はそう決断するや否や、しよげ返る春家を見向きもせず賭場守が待つ客間へと向かった。

第三章 鬼の財宝ですって！ の巻（前書き）

第三章 鬼の財宝ですって！ の巻

長押なげしに飾り彫刻を施した豪勢な客間では、色の白いぬめつとした顔の賭場守が座布団にあぐらをかきながら苛立った表情で座していた。散々待たされた賭場守は、盛んに貧乏ゆすりをしながらぶつぶつと独り言をつぶやいていた。

と、そこへ、深刻な顔をした紫が、おもむろに襖を開けて入ってきた。紫は客間へ入るなり、春家は食あたりを起こして床に臥せていると急場しのぎの嘘をついた。だが、賭場守はそんなことにはお構いなしに、強い訛りの山越弁でこう口を切った。

「病気だろつが何んだろつが知ったこちやねえだよ。お宅の殿には十万両の大金を貸してるだがね、金さえ払ってもらへばそれでええんだわ。分かっつとるだかね、あーんっ？」

「・・・！」

開口一番の無礼な態度に紫はむつとしたが、ここは辛抱のしどころとばかりに気持ちを抑え、穏やかな口調で話しかけた。

「我が殿が、賭場守さまから借金をしているのは承知しております。しかし、利息が元金の十倍とはあまりに高くはありませんか？」

「あーだつて？ 利息が高い？ 何言っただね、十日で十割は幕府が決めた法定金利の範囲内だがね」

賭場守は、聞く耳持たずとばかりに突っぱねた。

「しかし、世間一般の常識から考えてみても、とても納得のいく金利とは思えないのですが？」

紫は慎重に言葉を選んで食い下がった。

「文句を言うなら幕府に言っただけで済ませてえだよ。こっちは正当な商売をしとるだでねえ」

「とはいえ、十万両もの大金を用立てするのは容易ではございません」

「そんなの知らねえだよ、ここにちゃんと証文もあるだでねえ」
賭場守はそう言っただけで懐から紙片を取り出し、ぽいと紫の膝元へ放った。紫はあまりにも無礼なしくさにはらわたが煮えくり返る思いがしたが、ぐっと堪えて言った。

「元本の一万両は必ずお支払いいたしますので、利息の方はご勘弁願いたいのですが」

「いいや、勘弁ならねえだよ、一両一分でもまけるわけにはいかねえだ」

「そこを曲げて何とかお願いしたいのですが」
紫は苦渋の思いでひれ伏した。

「頭を下げてたつて駄目だがね。金がねえなら、あんたの体で稼げばいいだよ。だがその器量じゃ、一晩一文にもならねえと思うだがね、ギャハハハハ」

賭場守は大口を開けて笑い惚けた。

「な、何たる無礼な！」

このとき、ついに紫の堪忍袋のをが切れた。

「黙って聞いてれば調子に乗って、ずいぶん好き勝手なことを言うわね！ あんたこそ山越のどん百姓侍じゃないの。十万両だろうが百万両だろうが耳をそろえて払ってやるから、おとといきやがれ！」顔を真っ赤にして怒鳴りつけた紫は、敷いていた座布団をむんずと掴んで賭場守へ投げつけた。

「何するだかね！ 気でも狂ったでねえか？ おのおのがたお出会い召されだよ！ 奥方乱心でござるにて候だよ」

肝をつぶした賭場守は証文をつかんで懐にしまつと、尻に帆をかけて客間から出て行った。

「バカヤローっ！ さっさと城へ帰って肥え桶でも担いでろ！ 守銭奴の田舎侍がっ！」

怒りの収まらない紫は仁王立ちになって、廊下を駆けていく賭場守に罵声を浴びせた。

それから間もなく、城内の奥座敷に戻った紫さすがに冷静さを取り戻し、一人神妙な面持ちで考え込んでいた。

怒りのあまり啖呵を切って賭場守を追い出したものの、藩の財政状況を考えると十万両もの出費はできるはずもなかった。

「藩の蓄えをすべて出し切っても、四万両が限度だわ。後はどうやって捻出しようかしら？」

途方もない金額に紫は、ふっとため息をついた。

「あつ、そうだわ、収穫した米の一部と在庫米を闇で流せば一万両にはなるはずよ。それと、山林の所有権を競売にかければ二万両は見込めるわね・・・でも、まだ三万両足りないわ」

紫はとっさにそう思いついてやり繰りしたが、まだまだ不足分を補

いきれなかった。

「こうなったら恥を忍んで父上に頼むほかないわねえ」

そうつぶやいた紫は、実家に支援を仰ごうと、書棚から巻物を取り出し書状をしたためた。

と、そこへ、家老の小塚がおもむろに襖を開けて現れた。

「紫様、折入ってお話したいことがございます」

小塚はそう言って静かに畳の上に坐した。

「話などしている暇はありませんよ、あとのしてもらえませんか？」

紫は迷惑そうにあしらった。

「紫様、十万両もの大金をどのように捻出なさるおつもりですか？」

小塚は構わず切り出した。

「私が何とか都合をつけます」

紫は筆を走らせながらそう答えた。

「しかし、藩のふところ具合を考えますと、十万両もの緊急支出は無理ですぞ」

「分かってますよ、だからこうして八方手を尽くしているんじゃないんですか」

「紫様、殿も不安がっておられます」

「何が不安です。馬鹿殿のせいで藩がつぶれそうだというのに、まったく、首を絞めてやりたいくらいだわ」

「お気持ちは察しますが、言葉が過ぎますぞ。それに、殿も痛く反省しておられます」

「今さら反省しても手遅れですよ」

「紫様、気をお静めになつてください」

苛立つ紫をいさめた小塚は、そつと前へ進み出ると姿勢を正してこういった。

「紫様もご承知の通り陸奥藩は存亡の危機に立たされております。しかし、これを救う手立てがございます」

「えっ！」

突然の言葉に紫の筆がぴたりと止まった。

「紫様、これをご覧ください」

小塚は真剣なまなざしを向けて、一枚の古ぼけた羊皮紙を差し出した。

「何ですかこれは？」

受け取った紫は怪訝そうにそれを見つめた。

「これは城の書庫に収められていた鬼が島の地図でございます」

「鬼が島？」

「左様でございます。この地図は若君が誕生なされた時、わたくしが藩史にそのことを記録せねばならぬと思い、台帳を探していたところ、偶然発見したのです。地図に記された文言によりますと、この島には古くから鬼が住んでいるそうです」

「鬼ですって？」

「はい、しかもこの鬼たちは時折海を渡って殺戮や略奪を繰り返し、奪い取った財宝を隠し持っているのだとこの地図には書かれております。されば、この財宝を手に入れば十万両はおろか百万両の価値があるはずですよ」

小塚が語尾を強めていった。

「鬼の財宝ですって？ こんな時に戯けたことをいうもんじゃないありませんよ」

荒唐無稽な話に紫は思わず眉をしかめた。

「紫様、お言葉を返すようですが、古文書の文書は我が藩の祖先が書き残した記録書、すなわち正史でございます。一字一句たりとも間違いはございません」

「とはいえ、鬼がこの世にいるだなんて誰も信じませんよ」

「されば、桃から生まれた若君はどう判断なされます？ のちの世のものが果して信じましょうか？ いかがですか？」

小塚は気迫を込めて迫った。

「小塚・・・財宝はほんとにあるの？」
むらさきは気が揺らいだ。

「正史に書かれてある通り、必ずやあるはずですよ」
小塚が確信を持っていった。むらさきは半信半疑で地図を見入った。

「紫様、まだお疑いになるなら地図の裏をご覧ください。されば、

すべてが理解できませんぞ」
と、小塚が強い口調で促した。言われた紫がさつと地図を裏返すと、かすかに読み取れるほどの小さな文字が記されていた。紫が目を凝らすとそこにはこう書かれてあった。

いつの日か、桃より生まれし男おの子、鬼を退治して我らが恨みを晴らし、

奪われし宝を取り戻す

「こ、これは！・・・」
紫は愕然として言葉を失った。

「紫様、わたくしは今日の今まで、このことは胸の内に秘め決して口外は致しませんでした。しかし、今こそ、その時が来たのです。若君は天から与えられた定めを背負っておるのですぞ」
小塚がより強い口調で言った。紫は無言のまま小塚を見据え、震える手で地図を握りしめた。

それから五日後、桃太郎は盟友犬之進を従え鬼が島へ赴く向くことになった。鬼を退治して財宝を手に入れることは藩の極秘事項とされ、紫、春家、それに小塚の三人以外は誰も知る者はいなかった。紫と春家は、いかに運命とはいえ無謀ともいえる遠征には反対だったが、小塚の説得と桃太郎のたつての願いに折れ、やむなく承知したのだった。

朝もやが煙る港に、小塚がこの日のためにひそかに建造した小型帆船。ピーチ丸が停泊していた。

船の前には、三日三晩感ず目状態で操船技術を教え込まれた桃太郎と犬之進が、戦支度を整えて立っていた。

桃太郎は、南蛮渡来の完全防刃形戦闘服の上に桃の絵柄を染め抜いた陣羽織を羽織り、額には桃の絵柄を染め抜いた鉢巻をきりりと締めていた。

犬之進も同じ戦闘服を着込み、犬の絵柄の入った陣羽織を身にまとっていた。

二人とも、きびだんごを入れた皮袋と桃の果汁入った竹の水筒を下げ、柄の短い軽量脇差を帯の間にさしていた。

「父上、母上、しばらくの間留守にしますがどうぞご安心ください。僕はやる気満々なんです」

紫と、春家を前に、桃太郎はそう言って胸を張った。

「無茶をしてはいけませんよ、鬼は手ごわい相手なんだから駄目だと思っただらさつさと諦めて帰ってきなさい」

紫はさつそく親心を發揮して気遣った。

「大丈夫ですよ母上、この地図にも僕が鬼を退治して宝を持ち帰ると書いてあるんです。だから安心して待っていてください」

「そうはいっても気になるのよ。本来ならば殿が責任を取って鬼が島へ行くべきなんだけど、幕府の手前そうはいかないし・・・」

「母上、父上を責めないでください。僕は父上や母上、それに藩のために精一杯頑張るつもりです。それに犬之進も一緒なんですよ」

「まあ、何てけなげな子なの？ お前の気丈さは私にそっくりだわ」

紫は思わず桃太郎を抱きしめた。その一方春家は、何も言うことができず俯いてばかりいた。

「若君、出帆の時が参りました。船にお乗りください」

二人の傍らでじつと黙っていた小塚がおもむろに声をかけた。桃太郎は表情も明るくうなずき犬之進とともにピーチ丸へ乗り込んだ。

「若君は、千古せんこのころより勇者として選ばれた才子なんですぞ、ご自分の力を信じて必ずや鬼を打倒し、陸奥藩をお救いください」
小塚は目を潤ませて桃太郎を激昂した。

「小塚、そんな難しいことを言われても僕にはさっぱり分かんないよ。とにかく犬之進と一緒に鬼をやっつけて宝を持って帰るよ」
船べりに手をかけながら桃太郎が言った。

「若君、頼みましたぞ」

小塚は涙声で桃太郎を励まし、犬之進に顔を向けた。

「犬之進、一命を投げ打つてでも若君をお守りするのだぞ」

「はい、父上」

犬之進は顔を紅潮させて返事をした。

「犬之進、出発するぞ！」

桃太郎が高らかに声を上げた。

「はい、桃太郎様！」

犬之進は勢いよく帆柱に駆け寄り帆綱を引いた。とたんに白い穂が帆柱を上り、帆船ピーチ丸は朝のさわやかな風を受けながらゆつくりと岸壁を離れて行った。

別れを惜しむかのように春家が手を振り、小塚と紫はあらん限りの声を上げて船を見送った。

と、その時、松の幹に身を隠しながらじっとその様子を眺めていた一人の女忍者がいた。全身を黒装束で覆ったその女忍者は、ふふふっと含み笑いを浮かべると、やにわに懐から伝書鳩を取り出し、ぱつと空へ放った。

上空をぐるりと旋回した鳩は、瞬く間に飛び去り姿が見えなくなつた。

第四章 あれが鬼が島ですね？ の巻

小高い丘の上に山越藩の居城鶴亀城が厳めしく聳えたっていた。

城の中では威容を誇る風貌とは対照的に、暇を持て余した賭場守が本丸御殿の畳の上にごろりと寝転がっていた。賭場守は時折くしゃみをしながら、だらしなく伸びた鼻毛をポツリポツリと抜いていた。

「はっ、はっ、はあーくしょん！ ちくしょうめ、何で鼻毛を抜くとくしゃみが出るだかね？」

そう言つて愚痴つた賭場守は、抜いた鼻毛をばいと指ではじいた。と、そこへ、家老の加藤権左右衛門かとうしんえもんが、大慌てで現れた。度の強い丸メガネをかけた権左右衛門は、賭場守を見るなり短い足をばたつかせて駆け寄つた。

「賭場守様、一大事でござりまする！」

「なに騒いどるだかね？ びつくりするだねえか！」
賭場守は驚いて跳ね起きた。

「えらいこつてすよ！」

権左右衛門は顔を引きつらせてわめいた。

「耳元で叫ぶんじゃねえだよ、鼓膜が破れたらどうするだね？」
賭場守はさも迷惑そうに言ったが、興奮した権左右衛門は取り乱したままわめき続けた。

「金、金です！ 金がわんさか降って湧いて、濡れ手にあわの万歳三唱でござりまする」

「何をいつとるだかね？ 頭がぱーになつとるだよ」
賭場守は堪らず顔をしかめた。

「こ、これをご覧くださりませ」
権左右衛門は構わず手にした二つ折りの書状を差し出した。

「紙切れ一枚で騒ぐんじゃねえだよ」
賭場守が不愉快そうにひつたくつてよく見ると、それは、陸奥藩へ送り込んだ女忍者キジ子からの届いた極秘マーク入りの書状だった。書状に目を通した賭場守は、頭のちょんまげが扇型に逆立つほどびっくり仰天した。

「あーだつて！ しゃ、しゃく万両の財宝だつてか！」

「ちようでござりまするよ」

「権左右衛門！」

「はい！」

「瓢箪から駒とは、このことだよ」
賭場守は満面に笑みを浮かべて書状を懐にしまいこんだ。

「賭場守様、運が向いてまいりましたぞ」

「忍者を送っておいて正解だったがね」

「弱みを握ろうとしたら、宝の山にブチあつたのですよ」

「紫の態度は頭にきつとたでよ、ざまあみろとはこのこつたで」

「ごもつともです、賭場守様を、どん百姓の馬鹿侍と罵るとは無礼千万！」

「・・・ん？ これ権左右衛門、紫は百姓侍とは言ったが、馬鹿侍とは言とらんでよ。お前こそ無礼千万だだよ」

「いやしかし、そのようにおっしゃったと・・・」

「いいわけするだねえだよ」

「は、申し訳ありません」

権左右衛門は、確かにそういったはずだと、うつろな記憶をたどりながらぺこりと頭を下げた。

「ところで権左右衛門、鬼が島へは桃太郎と、手下の犬之進が向かったそうだよ」

賭場守はすぐさま気を取り直してにじり寄った。

「ではわが藩もさっそく軍勢を差し向け、財宝を手に入れることにしてはいかがと存じますが」

権左右衛門も、すぐさま調子を合わせて進言した。

「何をいつとるだかね、おめえは馬鹿だねえだか？」
それを聞いた賭場守はまた機嫌を悪くした。

「大がかりに事を進めたら、幕府に知られてしまつてねえか。お咎めを受けたら藩は取り潰しになるだで、そのくらいのが分からねえだかね」

「これはうつかりしておりました、申し訳ございません。しかしながら、このまま指をくわえてみているわけにもいきません、いったいいかがなさるおつもりで？」

権左右衛門が上目づかいに尋ねた。

「いかがも、たこがもねえだよ。そんなの簡単でねえか」

「・・・と申しますと？」

「横取りするだがね」

「横取り？」

権左右衛門は思わず目を丸くした。

「桃太郎は鬼退治の専門家だっていう話だで」

「おっしゃる通り、書状にはそのように書きしたためてありますが、それが横取りと何か関連でも？」

「おめえはほんとに馬鹿だねえだか？ 鬼を退治して宝を持ち帰るとき、すきを狙ってかっぱらえばええだけのこったですよ」

平然として賭場守が言つてのけた。

「なるほど、さすが博打奉行の賭場守様ですな、勝負所をちゃんとわきまえておられます。この権左右衛門まことに恐れ入りましたござりまする」

権左右衛門は、まるで太鼓持ちのようにそう言ってひれ伏した。

「権左右衛門、そんなに褒めるでねえだ、余は満足すぎるだだよ」

ギャハハハハ！」

賭場守は得意満面になって笑い出した。

それから間もなく、賭場守に命じられた権左右衛門は陸奥藩に潜伏していた女忍者キジ子に返信を送り、城内で待機していた怪力自慢の忍者猿蔵（うつけい）とともに、速やかに鬼が島へ向かうよう指令を出した。

ちょうどそのころ、にわか仕立ての帆船クルー桃太郎と犬之進は、覚えたての操船技術を駆使しながら南へ南へとひたすら南下を続けていた。桃太郎は地図を見ながら進路を決め、犬之進は風向きを見ながら舵を取っていた。二人は、陸奥藩を出て以来互いに役割分担を決めて船を操っていた。

「桃太郎様、鬼が島はこの方向でいいんですよ？」

舵を取っていた犬之進が傍らの桃太郎に声をかけた。

「そうだよ、このまま突っ走れば必ず鬼が島へ着くはずだよ」

地図を見ていた桃太郎が自信を持っていった。

「海も穏やかだし、これからのことを考えると胸がわくわくしますね？」

「その通りだよ犬之進」

使命感に燃えた二人は、ギラギラと照りつける強い日差しなど苦にもせず、一路鬼が島を目指して航海を続けていた。

それからまもなく、南進する船が順調に進んでいるのを確認した

犬之進は、舵輪にロツクをかけて固定すると、前方を見据えてた
ずむ桃太郎に声をかけた。

「桃太郎様、お腹が空きませんか？」

犬之進はそういつて腰の皮袋から携帯食のきびだんごを取り出した。

「そう言えばもう昼だね、ちょっと早いけど昼飯にしよう」

桃太郎もきびだんごを取り出し、水筒に入れた桃の果汁を飲みなが
らうまそうに食べた。

「このきびだんごは本当においしいですね」

犬之進は盛んにパクついた。

「おいしいに決まってるじゃないか、このきびだんごは母上が作っ
てくれたんだよ」

「えっ、紫様の手作りなんですか？」

「そうだよ、母上が元気が出るようにって、すっぱんの煮汁とすり
つぶした朝鮮ニンジン混ぜて作ってくれたんだよ」

桃太郎が嬉しそうに言うと、犬之進は急にさびしそうな顔をしてつ
ぶやいた。

「桃太郎様がうらやましいです」

「えっ、うらやましいって、どうしてだい？」

「……母上がいらしやるからです」

犬之進は一層さびしそうな顔をしていった。それを聞いた桃太郎は
はっとして犬之進に顔を向けた。

「あつ、そうか、犬之進の母上は死んじゃったんだよね」

「はい、もう五年になります。やはり病にかかってあつという間でした」

「そうだったね・・・犬之進、今でも母上のことが忘れられないかい？」

「・・・はい」

「元気だしなよ、きつとどこかで犬之進を見守っているはずだよ」

「・・・そうだといいんですけど」

犬之進は今にも泣きそうな声で返事をした。そんな犬之進を見た桃太郎は何も言えずに黙り込んだ。

犬之進も落ち込んだまま口を閉ざし、二人の間に気まずい空気が流れた。

桃太郎は何とか犬之進を励まそうと考えをめぐらした。そして、ふとあることを思い立って口を開いた。

「そうだ犬之進、また母上に会えるいい方法があるよ」

「えっ？」

「小塚がもう一度結婚すればいいんだよ」

「・・・父上がですか？」

「それも、犬之進の母上にそっくりな後添えをもらえばいいんだよ」

「えーっ？」

「そうすれば、また母上に会えるだろ？」

「・・・！」

突拍子もない話に面食らった犬之進は、ぽかんとして桃太郎を見つめた。桃太郎は構わずつづけた。

「犬之進じゃ言にくいだろうから僕が小塚に頼んでやるよ」

「えっ、桃太郎様が？」

「こういうことは意外と得意なんだ、僕に任せておきなよ」

「でも・・・」

「小塚だって犬之進のためだもの、嫌とは言わないはずだよ」

「そうかもしれないけど・・・でも」

犬之進は何をどう答えていいのやら返答に窮した。

「遠慮するなよ、たとえ小塚が断つても必ず説得してみせるよ」

桃太郎が熱心に言っただけで聞かせた。犬之進は困惑しながらも盛んに氣遣う桃太郎をありがたく思った。

「桃太郎様は、それほどまでに僕のことを・・・」

「あたりまえじゃないか、僕と犬之進は一番仲のいい友達じゃないか」

「桃太郎様、母上のことなんかもうどうでもいいです。僕は、僕は・
・・」
胸が熱くなる思いがした犬之進は涙ながらにそう言うと、手にして
いたきびだんごを思わず口の中に放り込んだ。

「うぶっ、げほっ、げほっ」

「犬之進、そんな急に食べたならむせちゃうよ」

桃太郎は感激するやらむせるやらと、忙しくふるまう犬之進を戸惑
った表情で見つめた。

それから三日後、順調に航海を続けたピーチ丸は遙か日本の海域
を超え、コバルトブルーに輝く南方の大海原に達していた。桃太郎
と犬之進はそんなまばゆい光景になど全く関心を示さず、ひたすら
鬼が島が現れるのを待ち望んでいた。やがて陽が落ち昼間の暑さが
和らいだころ、夕日に照らされた水平線のかなたに、ぼつんと浮か
んだ島影が見えてきた。

「桃太郎様、あそこに島が！」

目ざとくそれを見つけた犬之進が大声を上げて指差した。

「えっ、島が見えたって？」 「はい！」

たちまち活気づいた二人は、目の色を変えて舳先に駆け寄った。

「犬之進！」 「桃太郎様！」

二人は額に手をかざしてじっと目を凝らした。

「あれが鬼が島ですね？」
犬之進はたちまち闘志を燃やした。

「そうだよ、間違いなく鬼が島だよ」

地図と照らし合わせた桃太郎もすぐさま奮い立った。ピーチ丸は夕霧に煙る島へと吸い寄せられるように向かっていった。

と、そのとき、二人の気構えをくじくかのように、巨大な大鷲がバタバタと羽音を響かせて真後ろから迫ってきた。

「うわーっ、何ですあれは？」

「鳥だよ、ばかでかい鳥だよ」

小さな子供を一口で呑み込めるほどの巨大さに驚いた二人は、慌てて甲板に身を伏せた。と、次の瞬間大鷲はすさまじい速さで帆柱をかすめ、あっという間に鬼が島の方向へ飛び去って行った。甲板に這いつくばっていた二人は、思わず身震いして立ち上がった。

「桃太郎様、いったい何なんですあれは？」

驚きも新たに犬之進が言った。

「ぼくにも見当がつかないよ、でも、ひよっとすると鬼が島に住みついてる魔物かもしれないね」

大鷲が過ぎ去った方向をしげしげと眺めながら桃太郎がつぶやいた。

「えっ、魔物ですって！」

「だってそうだろう、あんな大きな鳥を見たことがあるかい？」

「じゃ、やっぱり魔物なんですね？ 鬼ならともかく、魔物だなん

て」

犬之進はすっかりおびえ切ってしまった。

「しっかりしなよ犬之進」

「そんなこといったて、相手が魔物じゃ、太刀打ちできませんよ」

「鬼だって魔物じゃないか、ついでだから、一緒にやっつけてしまおうよ」

「えーっ！」

犬之進は思わず体がこわばった。

第五章 相手はこわもての猛者だぜ の巻

夕暮れが迫る鬼が島の浜辺に、巨大な大鷲がふわりと舞い降りた。周囲を覗くようにギロリと目を光らせた大鷲は、太く頑丈な両足を砂の上に押し付けると、おもむろに黒い羽根を閉じて動きを止めた。そのとたん、大鷲の背に潜んでいた二人の忍者が、さっと羽をかき分けて浜辺に降り立った。すばやく岩陰に見を隠した二人は、すぐさま大鷲を飛び立たせ、沖合から向ってくる船に目を向けた。

「思った通りだわ。まっすぐ近づいてくるわよ」
帆をはらんだピーチ丸を見ながら山越藩の忍者キジ子が言った。

「馬鹿な奴らだ、何も知らずにやってくるんだからな」
傍らで眺めていたの猿蔵も、そう言って薄ら笑いを浮かべた。

「財宝を奪うまでは高みの見物だわね、鬼退治の腕前じっくりと見せてもらおうじゃないの」

「その通り、時の経つのをひたすら待つのみだぜ。どうなることやら結末をじっくりとご覧あれ、てなとこだな」

二人は余裕ありげに言葉を交わした。

「それにしても、骨折り損のくたびれもうけとはこのこったわ。桃太郎もいい面の皮だわねえ」
と、キジ子が続けて言った。

「言われてみりゃあ確かにその通りだ、だがなあ、考えてみりゃ賭場守もあこぎな真似をするぜ」

と、猿蔵がいきなり矛先を変えた。

「あこぎ？ 急に何言いだすのよ」「キジ子は思わず眉をしかめた。

「だってそうじゃねえかよ。宝を横取りするんだぞ、ひでえ話じゃねえか？」

猿蔵は構わず続けた。

「何言ってるのよ、主君に忠誠を尽くすのが忍者の役目じゃないの、善悪の判断なんか二の次だわ」

「建前はそうだとしても、それが暴挙なら家臣が戒めるのが人の道っていうもんだろが。そうは思わねえか？」

「偉そうに演説ぶつんじゃないわよ、あんたと私は山越藩専属の忍者なのよ、自分の立場が分かってんの？」

堪らずキジ子が声を荒げた。

「だからこそ言ってるじゃねえかよ、これからの忍者は隠密行動だけじゃなくて、藩の運営にも積極的に参加すべきなんだぞ」

と、猿蔵が反論した。

「馬鹿言つんじゃないわよ、たとえ身内でも相手を欺くのが忍者なのよ。その忍者が表立った行動できると思ってるの？」

「忍者だって藩の一員だぜ、そんな古くせえ理屈が通ると思ってるのかよ？」

猿蔵は我を忘れて述べ立てた。

「あんた何が言いたいのよ？ 単に給料を上げてもらいたいだけじゃないの？」

キジ子は胡散臭そうに猿像を見つめた。

「それもあるさ、五人も子供がいれば当然だろうが」

猿蔵はつい本音を漏らした。

「ほら見なさいよ、いくら能書き垂れたって結局は金じゃないの？」

「金の苦勞がお前に分かるはずねえだろうが」

「聞き捨てならないわねえ、それってどういう意味よ？」

「子持ちと独身貴族の差だよ」

猿蔵がぼやき交じりに言った。

「だからどうだっていうのよ、あんたこそ、のべつ幕なしに子供作るからピーピーしてんじゃないの！」

と、キジ子が食って掛かった。

「もう止めようぜ、言い争いしたって始まらねえよ」

嫌気がさした猿蔵はそう言っつて、再びピーチ丸に目を向けた。むかつ腹を立てたキジ子もばからしくなつて視線を戻した。そして二人は任務続行とばかりに、ピーチ丸を監視した。と間もなく、目を凝らしていた猿蔵が怪訝そうな顔でキジ子に言った。

「おい、何か様子がおかしいぜ」

「そうだわね」

言われた雉子もすぐそれに気付いた。風をはらんだピーチ丸は、速

度を増しながら一直線に浜辺へ向かって突き進んできた。二人は不審に思つて見ていたが、ピーチ丸は一向に帆を下す様子もなかった。

「このままじゃ砂浜に乗り上げるわよ」

「あいつら何をやらかすつもりなんだ？」
キジ子と猿蔵は困惑げに顔を見合わせた。

一方、ひたすら突き進むピーチ丸では、桃太郎と犬之進が何とか帆を下そうと悪戦苦闘していた。

「犬之進！ 綱が絡まってほどけないよ」
帆柱のてっぺんで桃太郎が声を張り上げた。

「桃太郎様！ このままでは島に突っ込んでしまいます、綱を切ってください！」

桃太郎を補助しようと、柱の真ん中にしがみついていた犬之進が必死の形相でそう叫んだ。

「そんなことしたら戻れなくなるよ」

「座礁するよりましです！」

「切るのはまずいよ」

「緊急事態です、そんなこと言っていられませんよ」
犬之進は構わず急ぎ立てた。

「分かったよ犬之進、もう一度やってみるよ」

桃太郎はそう言って、滑車に絡みついた帆綱を力いっぱい引つ張った。だが、綱はびくとも動かなかった。

「早く綱を切ってください！」

犬之進が待ちきれずに叫んだ。

「どうしてもダメなんだよ」

桃太郎は焦りの色を深めた。

「桃太郎様！ 早く綱を、早く綱を！」

浜辺がまじかに迫った犬之進はいてもたってもいられずにせつついた。

「やっぱり切るほかないか」

諦めた桃太郎は仕方なしに腰の短刀を引き抜き帆綱を切った。と、その瞬間、突き上げるような強い衝撃が船全体に伝わった。

「うわーっ！」

もろに反動を受けた二人は、折り重なって帆柱から滑り落ちた。

「痛っ！・・・」

「・・・犬之進・・・大丈夫かい？」

甲板にうつぶせになった桃太郎と犬之進は互いに顔をゆがませた。が、すぐに起き上って船の外を眺めた。

すると、うっそうとした茂みが外に広がっていた。

「・・・犬之進・・・鬼が島へ着いたよ」

桃太郎が腰を押さえながら言った。

「そ、そんなことより船が心配ですよ」

犬之進は体の痛みも忘れて舳先から飛び降りた。桃太郎も船べりに手をかけて浜辺に降り立った。

二人は船底に損傷がないか丹念に調べまわったが、薄い松の木を幾重にも張り合わせ作った堅固な船底は、穴が開くことなく、砂浜に乗り上げた傷がわずかについているだけだった。

「さすがだね、陸奥藩の船大工は日本一だよ」
ほっとした桃太郎が船底をさすって自慢した。

「のんきなことを言ってる場合じゃありませんよ、帰りはどうするんです？ 船を動かすには人手がいるし、帆綱だって手に入れないと」

犬之進はたちまち顔を曇らせた。

「あっそうか、そうだよね」
桃太郎ははっとして額に手を当てた。

「これじゃ先が思いやられますよ、桃太郎様、しっかりしてください」
犬之進は堪らず眉根を寄せた。

「人手と帆綱か？・・・」
桃太郎はしばし考え込んだ。

「どうするんです？」

「うんーっ・・・あっそうだ、鬼に手伝わせばいいじゃないか」
ふと思いついた桃太郎が真顔で言った。

「えっ！」

「犬之進も知ってる通り、僕は鬼より強いんだよ。だから財宝を積むのも船を動かすのも全部鬼にやらせればいいんだよ」

「そうか、そうですよね、鬼より強いってことすっかり忘れてましたよ。桃太郎様、うまい手を考えましたね」

「これで問題は解決したろ？」

「はい・・・でも、鬼が逆らったらどうするんです？」

犬之進は、今一つ不安になって尋ねた。

「逆らうなんてできないよ、僕たちの姿を見たら震え上がって降参するにきまつてるじゃないか」

「そうですよね、退治するぞって脅したらみんな泣き出しますよね」

「その通りだよ犬之進、鬼だって命が惜しいから素直に言うことを聞くはずだよ」

桃太郎が胸を張っていった。

「桃太郎様、これでもう安心です」

気をよくした犬之進は大船に乗ったような心持で桃太郎を見つめた。理の当然とばかりに言葉を交わした二人は、明朝日の出とともに出立することを決め、今夜は船の中で一夜を過ごすことにした。

その一方、岩陰から二人の会話に耳を傾けていたキジ子と猿蔵は、桃太郎たちが船に戻るや否や、さっと木立の中へ紛れ込んだ。

「おい、聞いたかよ？ 鬼を降参させるって言ってたぜ」
草むらに腰を下ろした猿蔵があきれ顔でキジ子にいった。

「驚くことないじゃないの、自信がある証拠だわ」
キジ子は無表情のままそれに答えた。

「馬鹿言えよ、あいつらろくに船も操れねえんだぜ」

「だからどうだっていうのよ？ 桃太郎がその気になればこっちだって仕事がやりやすいじゃないの」

「相手はこわもての猛者だ、甘く見たら逆にやられるぜ」
とたんに猿蔵の顔がこわばった。

「ずいぶん詳しく言うわね、鬼と戦ったことでもあるの？」

「あるわけねえだろうが」

「だったら、なんでそんなにビビってんのよ？」

「ビビりもするぜ。俺はな、キジ子と合流する前に鬼に関する文献を読んで下調べしたんだ、だから言ってるんじゃないか」

「給料が安いってばやいた割には、抜け目がないわねえ」
すかさずキジ子が皮肉った。

「何とでもいえよ、のんきに構えていられるのも今のうちだぜ」

「で、その文献に何て書いてあったのよ？」

散々馬鹿にしたものの、キジ子は気になって尋ねた。

「聞いて驚くなよ、鬼は組織だった武装集団、言ってみれば軍隊と同じだから壊滅させるには綿密な作戦が必要不可欠って、でかかと書いてあったんだ」

猿蔵は、でかかをことさら強調していった。

「でかかと書いてあったって、ほんとなの？」

「しかも、野戦や海戦の訓練を一時たりとも欠かしたことの無い、粒ぞろいの精鋭部隊だそうだ」

「えーっ！」

さすがのキジ子もこの言葉には驚き入った。

「うかつに手を出したら必ず失敗するぜ」

「だけど、桃太郎は鬼退治の専門家よ。それも、宿命として定められたつわものだわ」

「だからと言って、そうとは限らねえんだよ」

「・・・それってどういうことよ？」

キジ子は思わず訝ったが、猿蔵は構わずつづけた。

「俺が調べた資料に鬼退治の話があったんだが、その中に神風吹衛門かみかせふきえもんという鬼退治を宿命づけられた剣豪が殲滅に失敗して逃げ帰った話が載ってたんだ」

「失敗したですって？」

「ああつ、もの見事にやられたらしいぜ」

「いったいどうしてよ?」

「そいつはな、先祖からの言い伝えで鬼が島が実在するのを知ってたんだ。しかも、鬼が島は日本の領土で、そこを不法占拠している鬼たちは、固有の領土を侵犯していると教え込まれていたそうさ。

そしてある日、鬼を退治するのはお前の宿命だといわれた吹衛門は、たかが鬼相手に真剣を使ったのでは刀の錆になると、庭の竹を片っ端から切つて竹やりを作り、自分と志を同じくする傲慢鼻高流（ごうまんはなたかりゅう）の剣豪四十人を集め竹やり部隊を編成したんだ。

互いに健闘を誓った吹衛門達は、武運長久の守り札を下げて鬼が島へ乗り込むと、怒涛の勢いで鬼の城を急襲し即刻退去せよと迫ったそうさ」

「で、鬼はどうしたのよ?」

「決まってるだろうが、金棒を振り上げた逆に威嚇したそうさぜ」

「なるほどね、で、吹衛門は?」

「殺気立った吹衛門は、ずらりと並んだ鬼たちを睨み付けて、こう脅したそうさ（竹やりの餌食になるか、それとも生きて虜囚の辱めを受けるかいずれかを選べ）」と

「・・・で?」

「その時、鬼たちの後ろでじつとこの様子を見ていた青鬼がのしのと近づき（俺は鬼の総大将、窮奇きゆうきだ、お前たちの戦力が我々を上回るようなら降伏も考えようが、竹やりごときでわれらが精鋭部隊

を倒せるとでも思っているのか？ 戯け者めがっ！と罵った。

一目でこの鬼が首領だと確信した吹衛門は、黙れ！と一括して突き刺そうとした。すると窮奇は隣の赤鬼に向かって（おい紅凱こうがいお前の出番だ、金棒突撃隊の腕前を見せてやれ！）と命じたそうだ。

そのとたん、紅凱と数十匹の赤鬼が金棒を振りかざして一斉に襲い掛かっていった。吹衛門達も果敢に応戦したが、あつという間にぶちのめされ、竹やり部隊はその場で壊滅したそうだ。

生き残ったのは吹衛門を含めてたったの三人、しかもみな瀕死の重傷を負い、やつとの思いで国へ帰り着いたそうだ」

「じゃ、桃太郎も吹衛門と同じ目にあうってこと？」

「間違いねえだろうな」

「まずいじゃないの」

異様な風体をした荒くれ集団だとばかり思っていたキジ子は、その意外性に思わず表情がこわばった。

「あいつら敵情も知らねえで何が降参させるだよ。まったく笑わせるぜ」

猿蔵が吐き捨てるように言った。

「鬼の勢力はどのくらいなのよ？」

キジ子が気になって尋ねた。

「総大将をかしらに、ざつと百匹はいるだろうな」

「だとするとまともに戦っても勝ち目はないわね」

「あたりめえじゃねえか、大の大人が四十人がかりで攻め込んで

太刀打ちできなかつたんだぞ、結果は見え見えじゃねえかよ。俺はな、桃太郎が綿密な計画を立てて事に当たると思っていたんだが、当てが外れたぜ」

「面倒なことになったわねえ、となると、どうやって財宝を手に入れるかだわ」

「桃太郎は当てになられえんだ、おれたちで盗み出すほかねえだろうな」

「そうだわね・・・でも・・・」

「でもなんだよ？」

「地図が気になるのよ」

「地図？」

「桃太郎が持つてる鬼が島の地図よ、あの裏に桃太郎が鬼を退治して財宝を持ち帰るってはつきりと書いてあるのよ」

「そんなのは恨みがましい戯言にすぎねえぜ、もっと現実的に考えるよ」

猿蔵はそう言ってキジ子を諭した。

「ともかく桃太郎の出方を見ましようよ、それからでも遅くないわ」と、キジ子が言い張った。

「無駄だと思っぜ」

猿蔵はぼそりとそうつぶやき肩をすくませた。

第六章 黙れ小僧 強がっても無駄だ！ の巻

翌朝日の出とともに目覚めた桃太郎と犬之進は、合戦の身支度を整えて船を降り立った。

「犬之進、準備はいいかい？」

「はい、桃太郎様」

意気込みも新たに声を掛け合った二人は、鬼の居る城を目指して颯爽と浜辺を出発した。

一方、林の中で一夜を明かしたキジ子と猿蔵も、桃太郎たちが動くや否や、すぐさま行動を起こした。

「おい、若殿のお出ませ」

「わかってるわよ」

互いに目配せを交わした二人は、音もなくさつとその場を離れ、影のように桃太郎たちの後を追った。

やがて小一時間ばかりがたち、鬱蒼とした木立がまばらになると、地図を見ながら進んでいた桃太郎が、余裕ありげに立ち止まって犬之進に声をかけた。

「もつじき城が見えるはずだよ」

「いよいよ鬼と対決するんですね」

犬之進は早くも顔を紅潮させた。

「そつだとも犬之進、胸がわくわくするよ」

桃太郎も負けずに意気込んだ。

「ところで桃太郎様、鬼は城の中にいるんでしょうか？」

「城を出るのは、島を離れる時だけだつて地図に書いてあるよ」

「じゃ、さつさと片をつけましようよ」

「慌てるなよ犬之進、いくら急いだって結果は同じじゃないか」

「えっ、どうしてです？」

「どうしてって、鬼が僕たちを見たら降参するにきまつてるだろ」

「だから言ってるんですよ、僕たちの強さをすぐにも見せつけましようよ」

一刻も早く鬼と対決したい犬之進は、自信満々にそういつて桃太郎を促した。

せかされた桃太郎は一瞬ためらつたが、「それもそつだね」と、ころりと考えを変えて同意した。

二人は歩調を速めて歩き出した。それと同時にキジ子と猿蔵も足早に後を追つた。

と、間もなく、再び密林へ分け入つた桃太郎たちのいく手に、石造りの堅固な城が忽然と姿を現した。雲をつくような赤土の城壁で覆

われた城は、密林の中にそびえたつ岩山のようなだった。

城壁の正面には鉄の鉾を打ちつけた大門が、城の存在を誇示するかのようにつよく閉ざしたまま物々しく構えていた。

威圧するようなその姿に接した桃太郎と犬之進は、気を引き締めて城門に駆け寄った。

すると、閉ざされた門の正面に、朱色で書かれた警告文が貼り付けてあった。

警告

鬼にあらざる者の立ち入りを禁ず

尚、禁を破って侵入したものは

当鬼軍の軍規に照らし厳罰に処す

これは脅しに非ず

総大将 窮奇

「くそーっ、何が警告だ！」

それを見た桃太郎はたちまち腹を立てた。

「鬼は僕たちを挑発しているんですよ」

犬之進も盛んに目を怒らせた。

「生意気な鬼め！」

「こうなったら徹底的に懲らしめましょう」

「よし、犬之進、門をぶち壊して城へ踏み込むぞ！」

「はいっ！」

血気にはやった二人は、すぐさま立ちふさがる城門へ突進した。

「やっ！」 「わっ！」

と、掛け声も勇ましく真正面からぶつかっていったが、壊すどころかゴムまりのようにぼんと跳ね返された。

「くそっ！」

「こんなことでへこたれるもんか！」

と、再び体当たりしたが、また跳ね返された。

二人は何度も試みたが、固く閉ざされた城門は微動だにしなかった。

苛立った桃太郎は、腹いせ紛れに怒鳴り声を上げた。

「やい、鬼ども！ おとなしく降参して宝を渡せ！」

「命が惜しければ素直に従え！」

犬之進も城郭を見上げて喚き散らした。

あたり一帯に甲高い声が響き、城門の周りがにわかに騒がしくなった。

一方、草むらに身を隠してこの様子を眺めていたキジ子と猿蔵は、あまりの無謀さに思わず言葉を失った。

「あいつらバカじゃねえのか？」

「正面から攻め込むなんて信じられないわよ」

「不意を衝くならまだしも、あれじゃ、自殺行為だぜ」

「まったくもう、何を考えてんのかしら？」

二人は前途多難とばかりに桃太郎たちを見つめた。

その一方、城の最上階では、騒ぎに気付いた窮奇が副大将の紅凱をあわただしく呼びつけていた。

「いったい何事だ？」

毛むくじやらの窮奇が、腰につけた虎の褌を締め直して紅凱を問いただした。

「総大将、警告にもかかわらず人間どもが攻めてまいりました」
岩をも砕くような敵つい体の紅凱が、二本の角を敵めしく突き出してそう答えた。

「攻めて来ただと？」

「城門を打ち破ろうとしております」

「小癩な人間どもめが、突撃隊を総動員して速やかに応戦しろ」
声高に窮奇が命じたが、紅凱は軽く首を横に振った。

「その必要はありますまい」

「何？」

「敵といつてもたかが二名、恐れるに足りません」

「たった二人だとーっ、ふざけた奴らだ。ならばなおさら目障り、さっさとぶちのめせ」

「それは容易ですが、敵は気になることを言っております」

「気になることだと？ 城でも明け渡せと言っておるのか？」
窮奇はそう言つて鼻でせせら笑つた。

「いやそうではありません。敵は宝を渡せと喚いておるのです」

「何っ！」「」

「宝の所有は極秘事項、我々の他知る者はございません。なぜ敵が？」

と、紅凱が表情をこわばらせた。

「確かに渡せといったのか？」

「はっ」

「うーん、これは捨て置けんぞ」
窮奇は顔色を変えて唸つた。

「いかがいたしましたしょう？」

「どこから情報を得たのか聞きださねばならんな」

「おっしやる通りです」

「よし、ぶちのめすのは後だ。即刻ひとつらえて投獄しろ！」

「はっ」

命じられた紅凱は、すぐさま突撃隊の赤鬼たちを従え城門へ向かった。

ほどなく、固く閉ざしていた城門が、ぎぎーっと鈍い音を立てて開いた。

「桃太郎様、門が開きました」

「犬之進、突っ込め！」

苛立ちの頂点に達していた桃太郎と犬之進は、この機を逃してなるものかと刀を振りかざしてなだれ込んだ。

「鬼ども、宝を渡せ！」

「素直に言うことを聞け！」

二人は目の色を変えて、ずらりと並んだ鬼たちと対峙した。

「大ばか者とはお前らのことだ」

城門を取り囲むように赤鬼を配置していた紅凱は、顔色一つ変えずにそういつて嘲った。紅凱の言葉を聞いた鬼たちは、飛んで火にいる夏の虫とばかりに皆げらげらと笑いだした。

「生意気な鬼どもめが、降参するなら今のうちだぞ！」
桃太郎はひるむことなく脅しつけた。

「黙れ小僧、強がっても無駄だ！」
すぐさま紅凱が威嚇した。

「くそーっ、もう許さないぞ、鬼ども覚悟しろ！」
桃太郎は、声を張り上げるや否や猛然と襲い掛かった。

「やーっ」
それを見た犬之進も負けじと切りかかった。

「防御しろ！」
間髪入れずに紅凱が命じた。鬼たちは素早く身構え、びゅんと金棒を振って刀を払いのけた。
と、その瞬間、二人の刀が根元からばきりと折れた。

「あっ、しまった！」
桃太郎ははっとして怯んだ。

「そ、そんな・・・」
犬之進もとたんに勢いを失せた。

「たわいにない餓鬼どもだ」
郊外は吐き捨てるようにそう言うと桃太郎の前にぬつと顔を突出し
「降参するなら今のうちだぞ」と、桃太郎の声をまねて毒づいた。
それを聞いた鬼たちは、またげらげらと笑いだした。

「くそーっ」
かっとした桃太郎は、刀を投げ捨て紅凱に飛び掛かった。

「ばか者めが、いい加減に観念しろ！」
紅凱はさつと身かわして桃太郎を押さえつけた。

「あつ、桃太郎様！」

堪らず犬之進が駆け寄ったが、傍らの赤鬼に襟首を掴まれ、あつと
いう間にねじ伏せられた。

「痛つ、離せ！」

「くそーっ、こんちくしょうめ！」

羽交い絞めにされた二人は、抵抗むなく城内に連行されていった。
戦いは一瞬にしてけりがつき、再び城門が閉ざされた。

「ざまーねえぜ、まったくバカな奴らだ」

「何が鬼退治よ、がっかりだわ」

草むらの中で一部始終を垣間見たキジ子と猿蔵は、あっけない幕切
れに啞然としてつぶやいた。

「桃太郎の運命もこれまでだわねえ」

「だから言ったじゃねえかよ、桃太郎はあてにならねえって」

「期待したのが間違いだったわ」

「一縷の望み掛けるに及ばず、てなとこだぜ」

「こうなったらあなたの言う通り、あたしたちで宝を盗み出すほか

ないわよ」

さすがにキジ子もそう言っつて意を固めた。

「やっと分たようだな、そうと決まりや話は早えや。さあっ、行くぜ」

すぐさま猿蔵が促した。

草むらを立ち上がった二人はさつと城壁に駆け寄り、するすると赤土の壁を上りだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7816t/>

ギャグ小説・桃太郎

2011年7月15日00時28分発行